資料館ノート　第72号　　平成19年11月16日発行

江東の掘割・川　④

本所の開発とふたつの大動脈

江東区深川江戸資料館

江東区のほぼ中央を南北につらぬいて流れる大横川、その東を大横川に平行して同じく南北につらぬく横十間川。ふたつの川は、ともに万治２年（1659）、本所奉行の創設とともに開削された歴史ある川です。まさに本所・深川の本格的な開発とともに生まれ発展した「本所深川の大動脈」ともいえる川です。

今号では、ふたつの川の誕生とうつりかわりから、本所・深川の土地の開発と発展について概観していきます。

（１）南北をむすぶ大動脈　大横川と横十間川の誕生

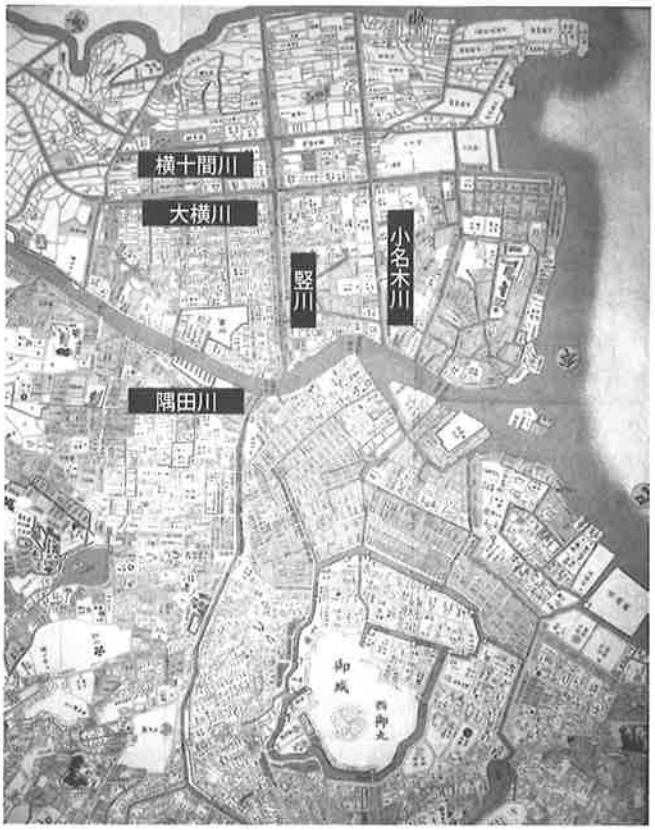
【本所・深川の開発】　近世に入って、本所の開発が本格的に行われるのは、明暦３年（1657）の大火後です。

万治３年（1660）、幕府に本所奉行という役職が置かれ、徳山五兵衛重政と山崎四郎左衛門重政の二人が任命されました。そして、竪川や横川、源森川（げんもりがわ）を開通させ、小名木川を整備し、掘り下げた土で湿地を埋め立て、隅田川の東側に土地を築きました。こうしてできあがった更地（さらち）に屋敷割をすることがふたりの任務であったといわれます。

このときの大横川と横十間川の南端は、ともに小名木川との合流点でした。小名木川より南の深川南部の開発は、まだ未完成です。元禄14年（1701）、深川の南側にあたる海岸の入り江の埋め立てが進み、元木場から猿江に移転していた木場が、現在の木場公園周辺のいわゆる「木場」に移転したのち、このふたつの川は、小名木川以南に延伸されました。

【ふたつの川の名称】「横」川という名は、江戸城に対して横の方向に流れていることからきています。地図に、江戸城が逆さにならないように描くと東が上になり、南北に流れる川が横、東西に流れる川が縦に描かれることになります。こうして命名された川が大横川（横川）、横十間川（十間川）、竪川です。

現在の地図は北を上に描く約束になっているため、南北に流れているこの二つの川は、縦に一直線になっています。このため、現代の私たちには違和感のある名称かもしれませんが、江戸城を中心に位置を把握しようとした当時の人びとの考え方の表れた名称といえるでしょう。



『御江戸大絵図』天保14年（1843）

（２）木場の材木と本所への物資の輸送　―大横川―

【川幅２０間の大横川】　大横川は、本所の開発が本格化された万治２年（1659）の開削です。本所奉行の任命に先立つこの年は着手の年と考えられ、整備は万治３年以降も続けられていたと思われます。

このときの大横川は、北十間川と合流する墨田区吾妻橋三丁目の業平橋ぎわから小名木川と合流する森下五丁目12までした。

【木場へ通じる亥ノ堀（いのほり）】　元禄14年（1701）、木場の移転に伴い、大横川は小名木川と交差して南に延伸しま

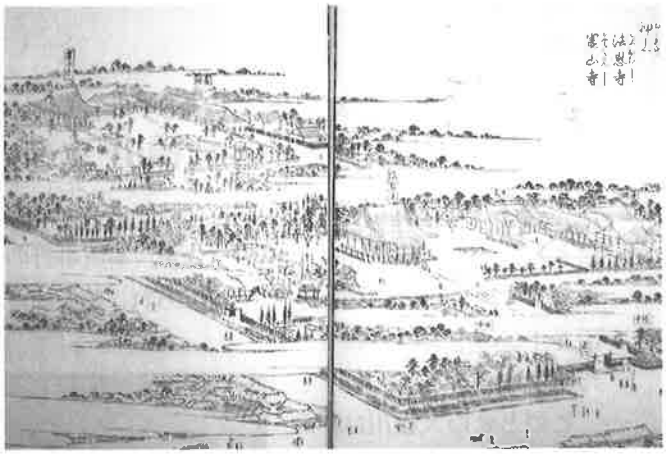
『本所竪川通り景』歌川広景画 館蔵

す。この部分は「亥ノ堀」とよばれました。元禄８年乙亥（きのとい）年の開削であることから付けられた名です。

こうして木場と本所を結んで南北をつらぬく大横川の流域には商人が住み、河岸が形成されていきます。これらはおもに西岸に沿った一列ほどで、その奥は整然と区画された武家屋敷でした。そこに住む武士たちの生活物資をもふくめ、大横川は、深川から本所への物資輸送の動脈となっていきます。

【流域の名刹・法恩寺】 大横川は、材木運搬の要路として機能したことはさきに述べた通りです。昭和２年に江戸時代の木場の様子を回想して描かれた『木場名所図絵』にも、木場から材木を出荷する時期を迎えると、大横川は混雑して塞がってしまうと述べられているほどです。小名木川や北十間川のように、船で行く行楽の人々の楽しそうな様子を描いた絵画などにはあまり登場しない川、ということができます。数すくない流域の名所としてあげられるのは、法恩寺です。『江戸名所図会』にえがかれた伽藍の面影が今も残っています。

法恩寺 2007・9・14



『江戸名所図会』「押上法恩寺」　天保７年 (1836)　館蔵

（３）流域に鋳物師が住んだ ―横十間川―

【横十間川沿いの鋳造業と近代工業】 横十間川も、大横川と同じく万治２年（1659）の開削です。

大横川の川幅が 20 間なのに対し、川幅 10 間（約 18 m）であったため、この名がつけられました。大横川が単に横川ともよばれるのに対し、こちらは単に十間川ともよばれます。

昭和 30 年 (1955) 大横川　江東区教育委員会蔵
木場の材木堀から、本所・竪川方面へ続きます。たくさんの材木が水面に浮かび、木場内の情景のようです。

流域には「亀戸銭座」があり、銭貨の鋳造が行われていました。三井親和（みついしんな）の筆による文字の入った４文銭が亀戸銭の特色であったといわれます。

また、小名木川との交差点付近は、「釜屋堀」とよばれ、釜六・釜七という著名な鋳物師（いもじ）が住み、ここで幕府の鍋・釜の御用を一手に引き受けていました。明治になってからも二軒は、さまざまな鉄製品をここで生み出しています。このほか近代工業の発展とともに横十間川流域では、紡績や化学肥料製造などが行われるようになりました。

【深川と城東の境】 のちに城東区と深川区の境となる横十間川の周辺は、深川の中心から少し離れることもあって、江戸時代から猿江泉養寺の蓮の花や亀戸龍眼寺の萩の花など、田園風景のなかの情緒ある名所が人びとを楽しませました。

（４）ふたつの動脈の現在

昭和 40 年施行の河川法は、水系ごとに河川をまとめて把握しようとするものでした。この時、大横川は水系を一にする大島川とつなげて「大横川」とよばれるようになりました。横十間川は仙台堀の一部をつなげて「横十間川」となり、ともに南北に流れてきたあと西に直角に曲がって隅田川に向かう形になり、残念なことに名称のいわれが有名無実となってしまいました。また、木場の新木場移転によって、材木輸送の要路としての役目を終えたふたつの川は、昭和５０代後半から部分的に親水公園に生まれ変わって、区民のいこいの場となっています。